

土曜 ライフ・楽しむ

年に一度でも「元気です」の便り



生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



昨年末、年賀状欠礼のあいさつが例年よりたくさん届きました。ご両親など親族のご不幸は、私同様に自身が高齢になり、そんな年回りになつたというご様子でしょう。本人が亡くなったとのご家族からの知らせに驚かされまじりました。

届いた年賀状に「私も高齢になり、今年で最後にします」と書かれたものもあつて、これは残念ながら肅々と受けるしかありません。

また、いくつかの取引先から「時節柄、年末年始のあいさつをやめることにした」という連絡も届きました。この「時節柄」を勝手に想像すると、世はIT時代になり年賀状ではなくメールなどに変更する、面倒になつてきた、コロナ禍で経営が思わしくないなど、それぞれ理由があると思えます。

ということでは年賀状の総数は大幅に減つてしましました。最盛期に比べほぼ3分の1というところでしょうか。やはり寂しさを感じます。



大学時代の友人から「コロナ禍で自宅にいる時間が増えたので、今までやってみたいと思ひながらできなかったことを実行した」と聞きました。それは、お互いに顔と名前を認識できる人を何人思い浮かべることができたか、という実に単純なことなのです。

「お互いを認識」が重要で、自分が知っていても相手も自分を認識しないだろう人は含みません。



子どもの頃から就職するまではアルバム頼りながら約150人、また就職後の10年間は就職や結婚など局面が大きく動いた時期で約150人。その後は仕事の立ち位置が大きく変わり、出会いもまた新鮮なため結構な数が思い浮かんだそうです。しかしここに来て特にプライベートで知り合う人数が急激に減つてきたと嘆き、新しい出会いに力を入れたと言います。

東京に戻つた彼は小中高の仲間の話をよくするし、近くにいる大学の友人ともよく会うようです。生まれ故郷の大阪を早くに離れた私とはとうとう、学校時代の同窓会出席は皆無、高校の友人から届く写真を見ても誰が誰だか全くわからないのが現実です。

若い頃に全国を旅し、転職を何度も経験し、今の仕事でもたくさんの方と出会いました。その意味ではお互いに認識できる人はたくさんいますが、すごい勢いで年賀状は減つたし、さらに減るでしょう。

年に一度だけのやりとりでも、それがたとえ型どおりの文面であっても「ああ元気でいるんだな」とうれしくなるものです。頑張つてもう少し年賀状を続けるつもりです。そして新しい出会いも大いに楽しみたいと思つています。